

学校経営と組織マネジメントの研究 —学力向上のための校内研究の改善・充実—

教育実践力高度化コース

(16AD009)

野中 拓二

【指導教員】 大澤 利彦 宇佐見 香代 馬場 久志

【キーワード】 校内研究 校内研修会 教員 資質向上 授業力向上

1. はじめに

社会を取り巻く環境が大きく変化している今日、学校が向き合うべき課題も多様化、複雑化しており、個人の力量だけでは解決が困難になっている。そのため、これからの学校経営にはマネジメントの手法を取り入れ、組織力を高める必要がある。本研究では校内研究に絞りマネジメントの手法を取り入れ、改善・充実を図っていくことをねらいとしている。

平成28年12月の中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」では、学力が全体として改善傾向にあるが、子供たちが情報を的確に理解し、自分の考えの形成に生かしていけるようにすることには課題があると指摘されており、全国学力学習状況調査のB問題で求められているような学力を育成する必要があると考える。

また、平成27年12月の中央教育審議会答申「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」では、「『教員は学校で育つ』もの」という考えの下、教職員の資質能力向上には、学校内において同僚の教員とともに支え合いながら、学び合う校内研修の充実が必要不可欠と指摘されている。これらは、チームの一員として組織的、協働的に諸課題に取り組むことで、教員の資質能力向上を目指すという考え方である。

一方で、教員の資質能力向上に欠かせない校内研修の課題として、木原俊行(2010)は、以下の5点を指摘している。

- (1) 機会が限定されている
- (2) 個々の教師の問題意識を反映させがたい
- (3) 「型はめ」に陥りやすい
- (4) 閉鎖性・保守性が強い
- (5) 適切なリーダーシップが発揮されていない

また、石川晋・大野陸仁(2013)は校内研修の問題点として、次の4点を指摘している。

- (1) 授業公開を全員がやりたがらない
- (2) 研究部が一方向的に提案するだけで、先生方は受信するだけ
- (3) 研究の話し合いで活発な交流が生まれない
- (4) 日常の忙しさの中で研究に対してネガティブな気

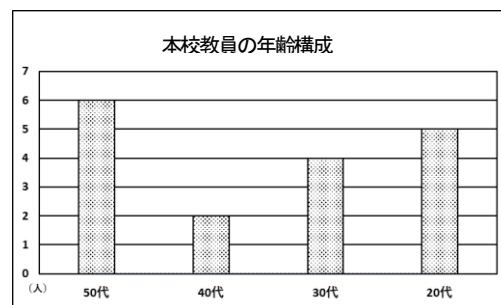
持ちを持っている

本校でも校内研究の課題として、一部の教員に任せて受け身の姿勢になりがちなことや多忙感から研究に対してネガティブな印象を持っていることが挙げられる。そのため、教員の資質向上のためには、教員の意識を変え、校内研究を改善・充実させることが喫緊の課題となっている。

2. 本校の現状と課題

(1) 校内研究について

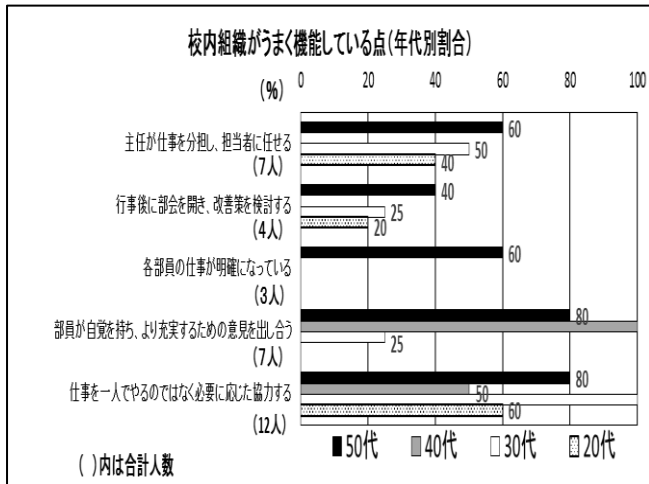
本校は埼玉県深谷市の北部に位置し全校児童235名、教職員23名の小規模校である。年齢構成は50代が最も多く、次いで20代が多い。



校内研究に対して、積極的に参加する教員がいる一方で、消極的な教員もいる。また、校内で行う授業研究会に対して負担と感じている教員が多く、年度当初の授業者を決める際には時間を要することが多い。さらに、授業研究を行うことが目的になってしまっており、本来の目的である子供たちの学力向上のために「授業を改善する」、「授業の力量を高める」、「授業についての学問的研究を発展させる」ことが行えていない状況にある。これらのことが起こる理由として以下のことが考えられる。

- ・毎日の業務からくる多忙感により、研修や研究が後回しになってしまう。
- ・研究テーマが子供の実態と一致していない（課題把握が不十分）
- ・全職員による課題の共有ができていない
- ・研究授業が授業者任せになってしまう
- ・研究授業を行ったきりになってしまう、成果・課題が次の授業に生かされていない（PDCAのサイクルが確立されていない）
- ・研究主任などのリーダーに依存してしまい、研修や研究に対して受け身になってしまう

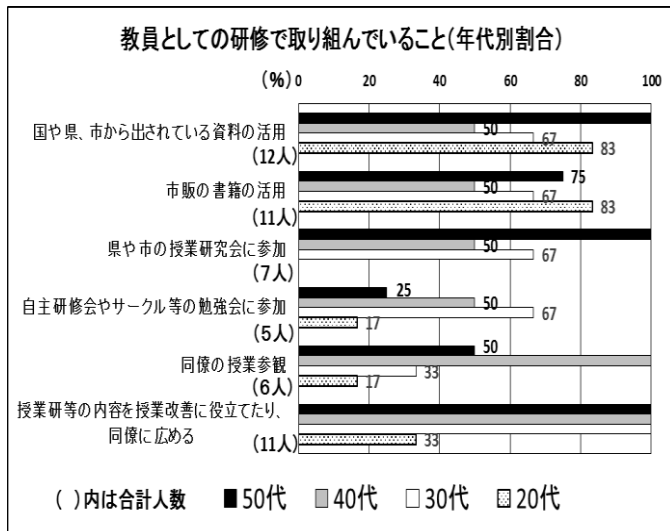
また、本校の教員に校内組織に関するアンケートを取ったところ、以下のような結果になった。



多くの教員が校内組織がうまく機能している点として、「仕事を一人でやるのではなく必要に応じて、教職員全体で協力して行っていること」を挙げている。一方で、「部員の仕事が明確であること」や、「行事後に改善策を検討していること」については、校内組織がうまく機能している点に挙げている教職員は少ない。また、年代別にみると、20代の教員は校内組織をより充実させるための意見を言っている教員は少ない。

校内研究でも同様のことが言え、研究部の人数が多く、責任が不明確なためリーダーが一手に仕事を担い研究を進めていたり、せっかく授業研究を行っても次の授業に改善策が生かされていないことがある。また20代の教員が意見を言っていないことも研究部の人数が多いことと関連していると考えられる。

以下に示すのは教員としての研修で取り組んでいることの調査結果である。

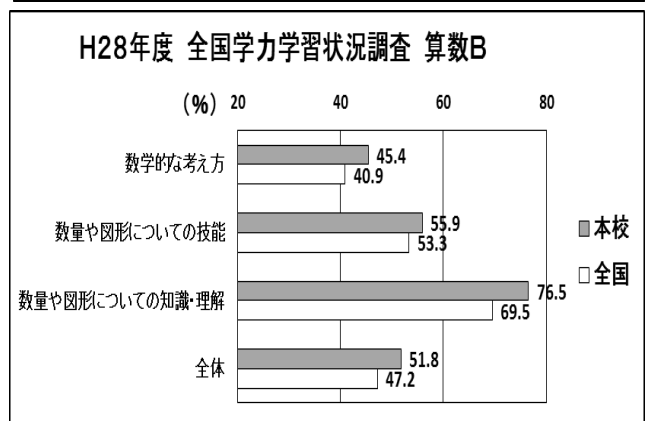
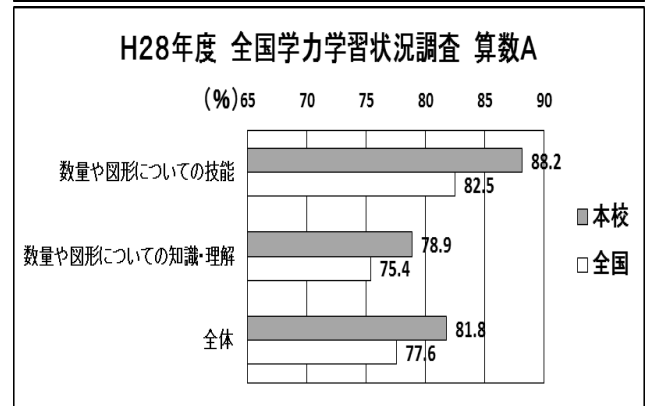
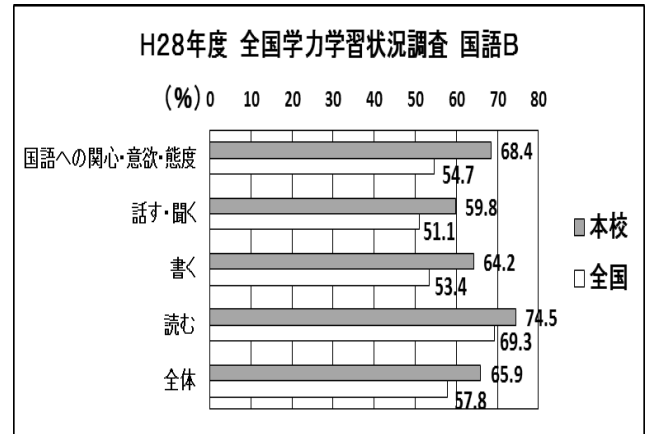
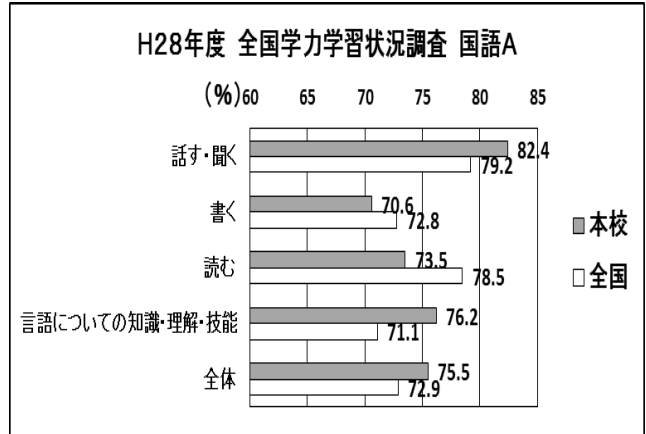


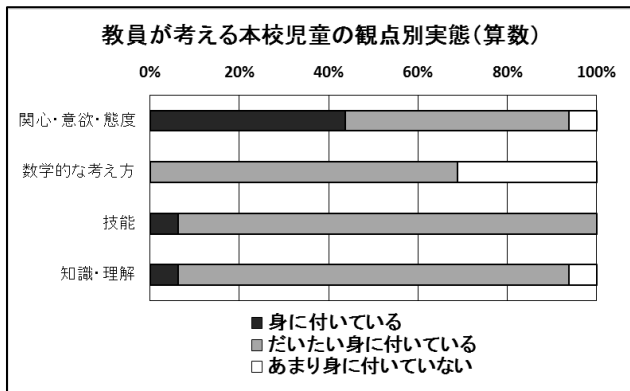
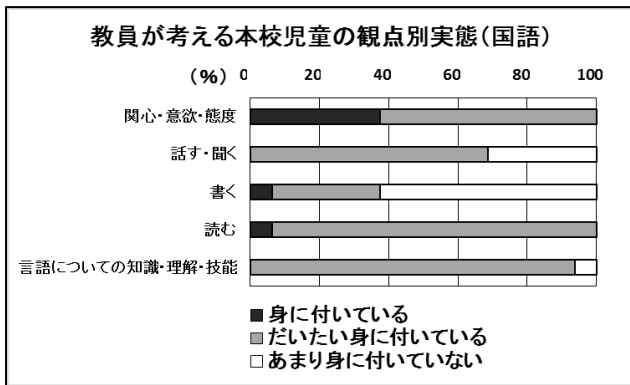
多くの教員が、資質向上のためにさまざまな研修に取り組んでおり、年齢が高いほど、他の教員とともに学ぶ機会が多いことが分かる。20代は書籍や配布資料を活用するなど、個での学びとなっている教職員が多い。また、互いの授業参観や自主的に勉強会に参加している教員は少なく、研

修の中で同僚と学びあう機会や授業参観の機会を設定することが必要となっている。

(2) 学力について

以下に示すのは、本校の平成28年度全国学力・学習状況調査の結果と教員の児童の学力に対する意識調査の結果である。





全国学力・学習状況調査の結果より、本校児童は国語 A 問題の「読む」、「書く」の正答率が全国平均と比較して低く、算数 B 問題の「数学的な考え方」は全国平均の正答率を上回っているものの、他の項目と比較すると正答率が低く、課題があると言える。

教員の児童の学力に対する意識調査の結果は国語に関しては「書く」と「話す・聞く」の項目があまり身に付いていないと感じている教職員が多く、全国学力・学習状況調査の結果とは、一致していない部分がある。理由としては、ペーパーテストでは身に付いているものの、学校生活全体で考えると、あまり身に付いていないと考える教職員がいるためであると考えられる。一方で算数に関しては、ほぼ一致している結果となった。学力調査の結果と教職員の意識のズレを解消しながら、授業改善を行い児童の学力向上につなげていく。

3. 研究の目的と仮説

(1) 研究の目的

以上のような本校の現状と課題から、子どもたちの学力向上のために、校内研究をより一層充実させ、校内研究に対しての意欲を高め、教員の授業力を向上させることを目的としている。

(2) 研究の仮説

①子どもたちの学力向上のために校内研究の内容や進め方を改善し、より一層充実させることで、教員の校内研究に対しての意欲を高めることができるであろう。

②全国学力・学習状況調査や埼玉県学力・学習状況調査の結果を生かして授業改善を行えば、教員の授業力を向上させ、子どもたちの学力を向上させられるであろう。

4. 研究の方法

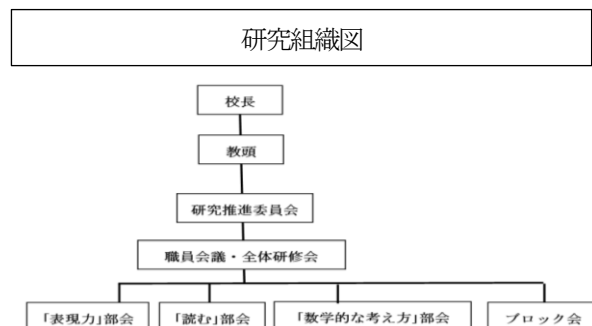
本研究は、校内研究に対しての教員の意欲を高めることで、授業力を高め、子どもたちの学力向上につなげて行くことを目的としている。そのための以下の方法で行っていく。

(1) 校内研究に対しての教員の参加意欲を高める

これまでの校内研究では、研究主任が中心となり、研究推進委員会や管理職と相談しながらその年の研究テーマを決定することが多かった。全教職員で自校の課題の共通理解を図ることが疎かになってしまい、見通しを持つことが難しく、校内研究に対して消極的になってしまったことがあった。そこで全国学力・学習状況調査や埼玉県学力・学習状況調査の結果を生かし、課題の共通理解を図り、子どもたちの学力向上のために必要な校内研究の進め方を話し合う。自分たちで課題を見出したり、進め方を決定することで、校内研究に対しての「やらされている感」をなくし、意欲を高める。

また、これまでの校内研究では、研究テーマに対して2つの部会に分かれ、部長が中心となり、6～7名の教職員で各部会を行ってきた。その結果、一部の教職員が意見を言うだけの部会になってしまい、深い話し合いが行われず、研究部会が形骸化していた。2の(1)で上述したとおり、20代の若手教員の発言の機会が限られていたことも、このことが関係していると考えられる。そこで、部会の人数を3～4人にすることで、部会内での積極的な対話を促すようにする。部員は、年齢構成が偏らないように配慮し、ベテランと若手が共に学び合いながら、研究を進められるようにする。部会を少人数で編成することで、部員が集まりやすく、空き時間等を利用した活動も期待できると考える。以下に示すのは研究組織の案である。

部会を「読む」、「表現力」、「数学的な考え方」としたのは、この3項目が学力調査の結果や教職員の意識として課題に挙がっていたためである。また、「話す・聞く」こと、「書く」ことはお互い関連しあっていると考え、表現力部会とした。

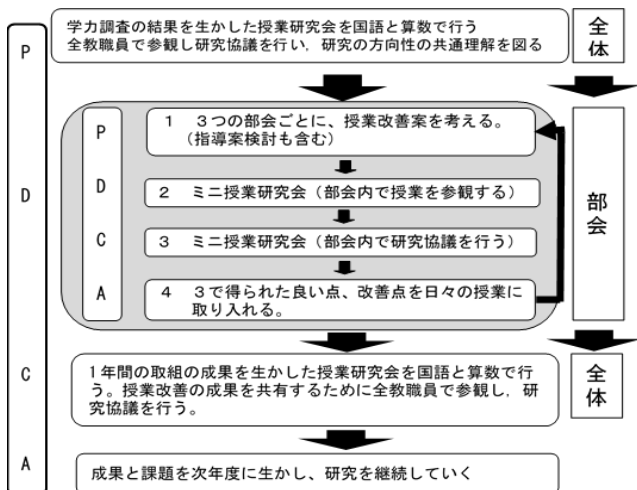


(2) 授業改善サイクルを確立させた校内授業研究会

全国学力・学習状況調査や埼玉県学力・学習状況調査の目的の1つは、結果を授業改善に役立てることである。このことから、校内授業研究会を通して本校の課題として挙げた「読む」、「表現力」、「数学的な考え方」に視点を置いた授業研究を行う。

また研究授業に対して消極的であることも、2の(1)で上述した。その理由としては、指導案作りに多くの時間を費やすこと、授業づくりが研究授業者任せになっていることが考えられる。これらのことを解決するために、指導案の焦点化を行い、部会で積極的に話し合い、授業づくりをしていくことで、授業者の負担を軽減していく。

さらに、研究授業を行ったきりになってしまい、成果・課題が次の授業に生かされていないことから、以下のように授業研究を行い、授業改善のサイクルを確立する。



年度の最初は全体で研究の方向性を確認するために、年度の最後は成果を共有するために、研究授業を全員で参観し、研究協議を行う。その間の研究授業は、教員の人数の事情で毎回クラスを自習にして参観することが困難なことが予想されるので部会内でミニ授業研究会を行い、授業改善を行う。

授業研究会の研究協議も工夫を行う。本校ではこれまで、授業研究会の研究協議を①授業者振り返り、②授業者への質疑・応答、③視点に沿って研究協議という流れで一斉に行ってきた。そのため、発言が一部の教員に限られてしまったり、授業の感想を述べるだけで終わってしまったりして、協議が深まらないことがあった。また、ワークショップ型の研究協議を取り入れた際には、話し合い後のまとめ方が不十分なため結果として、話し合われた内容を授業改善につなげることができなかった。

これらのことから、研究協議においては積極的な対話を促すために、話し合いの視点を絞ったワークショップ型の研究協議会を取り入れる。また、話し合いのグループは各部会の部員が、同じグループにならないようにしたり、ジグソー法を取り入れたりと、話し合いが深まるようにする。

6 期待できる成果

(1) 自分たちで話し合いながら校内研究の内容や進め方を考え、行っていくことで、校内研究に対する教員の意欲が高まる。

(2) 2つの学力・学習状況調査の結果を生かした授業改善を行うことで、教職員の授業力が向上し、子どもたちの学力向上につながる。

7 研究計画

1 学期	<ul style="list-style-type: none"> 校内研究計画の作成 【国語】「読む」、「表現力」、【算数】「数学的な考え方」の3部会分け 研究推進委員会で指導案の形式（これまでの指導案よりも簡易化・焦点化されたもの）の検討・決定 部会に別れ、授業改善案の検討や指導案検討 授業改善案を取り入れた校内授業研究会を行い、方向性を確認（全員参加） 1回目の授業を受け、各部会で研究協議で出た授業改善案を取り入れた、ミニ授業研究会（同じ部会のメンバーは必ず参加、他の部会ではできれば参加）
夏休み	<ul style="list-style-type: none"> 中間報告会（各部会で1学期の実践をもとに課題と授業改善案を検討、2学期にどんな方で授業をやっていくか全体に提案し、共通理解）
2 学期	<ul style="list-style-type: none"> 部会ごとのミニ授業研究会。 全員参加の授業研究会を行い、成果を共有（全員参加） 県学調の類似問題などを用いた効果の検証 教員の児童の学力に関する意識調査（2回目） 教員の今年度の校内研究に対する自由記述
3 学期	<ul style="list-style-type: none"> 最終報告会 研究のまとめ

8 研究の実際

(1) 昨年度と今年度の校内研究における内容・進め方の比較

昨年度	今年度
<ul style="list-style-type: none"> 1つの教科で研究を行う 	<ul style="list-style-type: none"> 児童の学力向上というテーマの下、国語と算数（観点を絞って）で行う。
<ul style="list-style-type: none"> 研究テーマは前年度に管理職と研究主任を中心に決定する。 	<ul style="list-style-type: none"> 今年度1回目の校内研修で、全職員で前年度の学力・学習状況調査の結果を分析。本校児童の課題を出し合い、研究テーマを決定する。 2回目の校内研修で本校児童の学力の課題を解決するために、具体的にどのような授業をするか部会で話し合う。
<ul style="list-style-type: none"> 研究の部会は2つ（「授業研究部」、「調査環境部」）メンバーは6~7人。 	<ul style="list-style-type: none"> 研究の部会は3つ（「表現部会」、「読む部会」、「数学的な考え方部会」）メンバーは3~4人 夏休みに中間発表会を行い、部会間で行っていることの共通理解を図る。 三学期に最終報告会を行い、今年度の成果と課題の共通理解を図る。
<ul style="list-style-type: none"> 校内研修会では、指導者や発表者の話を聞くだけの場合が多い。 	<ul style="list-style-type: none"> 校内授業研究会、校内研修会において、教員の希望に合った専門家を招き、講義や演習を行う。

・校内で2人～3人が研究授業を行い、全員で参観する。	・各部会で1人は全員参観の校内授業研究会、他のメンバーは部会内でミニ授業研究会を実施し、参観する。
・研究協議会は、全員一斉に協議（感想を言うだけになってしまう場合もある）をする。	・研究協議会では、ワークショップの機会を多く設定し、主体的に参加できるようにする。
(その他)	・放課後の時間等を活用し、部会で指導案の検討や教具の開発を行う。

(2) 今年度の研究の実際

【校内研究に対する意欲を高めるために】

① 全教員で研究テーマや研究の方向性を決定する

第1回目の校内研修において、昨年度の学力学習状況調査の結果や教員が普段から感じている意識をもとに、本校の児童の学力の課題を把握し共通理解を図った。そして、どのような力を児童に身に付けさせたいか考え、研究テーマや研究の方向性を決定した。以下に本校教員が考えた児童に身に付けさせたい力を示す。

※（ ）内は同様の内容を記述した教員の人数

・「なぜを考え、答えをことばで書き表す力」→書く力、表現力（1人）
・「読む力」（2年生）書くことは『あのねノート』を使ってやっているの。（2人）
・ノートづくりを意図的・計画的に指導し、児童の学びの振り返りや既習事項の整理に活用（2人）
・一時間ごとの学習内容と指導上の留意点を明確にした授業→授業改善（4人）
・日常生活に生きてはたらく言語能力の定着→日常生活との関連させた授業（3人）
・読む力→読むときのポイント指導（1人）
・算数→主にB問題を活用した各単元での指導（3人）
・国語→読む力、書く力（作文、短文、感想文）（3人）
・算数→各学年の大事なポイント、系統性を押さえた学習（1人）
・全学調の過去問題を分析し、単元ごとに取り扱えるようにする（4人）
・長文を読み取る力→習うより、慣れ。長文にへこたれない力（1人）

上述の内容を課題として受け止め、今年度の研究部会を「表現力部会」、「読む部会」、「数学的な考え方部会」の3つの部会とした。

第2回目の校内研修では、研究部会に分かれ、課題として挙げられた力を身に付けさせるために、具体的にどのような授業を行っていくかを考えた。以下は部会ごとに考えた具体的な授業改善の視点と児童の学習活動である。

国語	「読む」部会 【視点】 「具体的な叙述を基に理由を明確にして読み取らせる」 【学習活動】 ・生活経験と結びつけながら、言葉の意味を押さえる。 ・接続後の意味を正しく押さえ、それに注意しながら文章を読み取る。
	「表現」部会 【視点】 「語彙力の強化し、自分の気持ちや考えを豊かに表現できるようにさせる」 【学習活動】 ・日記の指導（授業内）→「したこと」、「見たこと」、「聞いたこと」、「話したこと」、「気持ち」等を書く ・物語の情景をみんなで考え合う。（学び合い） ・物語の続きを考えて書く。
算数	「数学的な考え方」部会 【視点】 「自分の出した答え（解答）を説明できる力を身に付けさせる」 【学習活動】 ・授業の中でなぜその解答になったか、“理由”を書く。考えの手順を説明する。 ・しあげの問題等でも答えだけではなく、答えを導き出した手順を説明をする。 ・ペアやグループで、学び合いをする。

② 部会を少人数で編成して各部員に責任感を持たせる

これまで5～6人で編成してきた研究部会であったが、今年度は部会の数を増やし、3～4人で部会を編成した。また、部会のメンバーはベテラン、中堅、若手をバランスよく編成した。

部会	50代	40代	30代	20代
表現力	1人		1人	2人
読む	2人	1人		1人
数学的な考え方	1人		2人	1人

③ ワークショップを多く取り入れ積極的な発言を促す

校内研修会や授業研究会後の研究協議の際には、できる限り、ワークショップを設定した。その際、部会の枠を超えてメンバーを構成した。



ワークショップで話し合う様子

【積極的に授業を改善し、教員の授業力を向上させ、子どもたちの学力を向上させるために】

① 部会ごとのミニ授業研究会を行い、授業改善を促す

授業を改善し、授業力を向上させるために、全教員が参加する校内授業研究会とは別に部会ごとにミニ授業研究会を行った。授業者と同じ部会のメンバーは必ず参加し、それ以外の部会のメンバーは自由参加とした。放課後の研究協議は、管理職と参観者で行った。



部会ごとのミニ授業研究会の様子

② 指導案を焦点化する

指導案づくりに負担感を持たせないために、研究推進委員会で話し合い、指導案のポイントを絞り焦点化を行った。具体的な指導案の内容は以下の通りである。

授業研究を行う際の指導案

第〇学年〇組〇〇科学習指導案			
1	単元名・教材名		
2	目標（単元の目標）（単元を通して身に付けさせたい力）		
3	評価規準		
4	単元の指導計画		
時間	学習内容		
5	本時の目標		
6	部会で考えた授業改善案（仮説）等と手立て（具体的にこんなところを今日の授業の中で工夫・改善しましたというところ。見てほしいところ） ※今年度の研究の一番の要です。		
7	本時の展開（○/○）（深谷スタンダードを参考に）		
時間	学習活動	学習内容	・指導上の留意点 ○評価 ◇工夫、改善点
8	板書計画		
※参観者は授業者へフィードバック（感想等を書いて渡す）を行う			

③ 各役員が各部会の取組を知り、共通理解を図る

夏休みの校内研修の際に、全教員が各部会の取組を知り、共通理解を図るために、中間発表会を行った。中間発表では、部会での1学期の取組と2学期に行う授業案を発表した。



中間報告会の様子

(3) 年度内における今後の校内研究の予定

- ・部会ごとのミニ授業研究会（1月）
- ・全員参加の授業研究会（1月）
- ・各部会の最終報告会（2月）

9 研究の調査結果

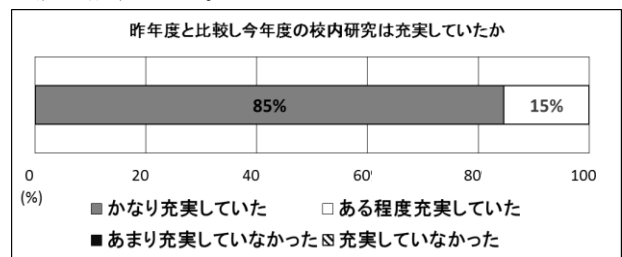
(1) 【仮説1に関わる調査結果】

以下は本校教員対象に今年度の校内研究において、昨年度と比較して、良かった点やより充実した点についての調査を行った結果である。

- ・指導者の指摘が的確で参考になった。
- ・校内研修の中で部会を定期的に行っていたり、中間発表会を行っていたので、全員が見通しをもって取り組むことができた。
- ・ワークショップ型の協議の際に発言者を事前に指名されていたので、色々な先生方に発表の機会が与えられていて良かった。（いつも同じ人が発表ではないのが良かった。）
- ・いろいろな先生方の授業を参観し、指導法がとても参考になった。
- ・大学の先生方の話を聞く機会があり勉強になった。
- ・昨年度は、ブロックごとの研修だったが、今年度は他学年の授業も見ることができて良かった。
- ・部会でのテーマが決まっていたので、それに沿った授業研究会ができた。
- ・ワークショップ型の研修が多く、発言の機会が増えた。
- ・授業を公開することで授業改善が進んだ。
- ・様々な分野の専門家を招聘することで、多くの学びがあった。
- ・ワークショップ型の研修が多く、しっかりと考える必要性があった。
- ・校内研究で何をやるかが明確になった。段取りがきちんとされている。
- ・ワークショップ型の研修で自分の発言の機会が増え、他の方の発言・意見も多く聞くことができたので、自分の教養・知識になった。
- ・授業改善への意識が強くなった。

記述内容から、今年度の校内研究について肯定的に捉えている教員が多いことが分かった。

また、以下に示すのは「昨年度の校内研究と比較して今年度の校内研究は充実していたか」という問いについての調査結果である。

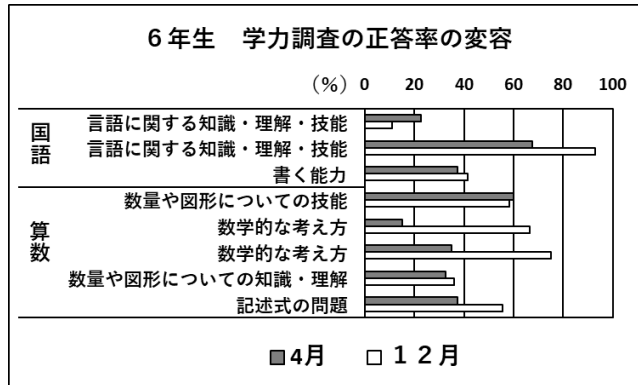
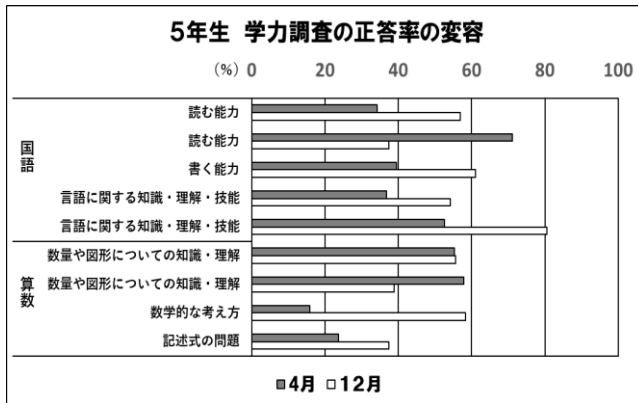
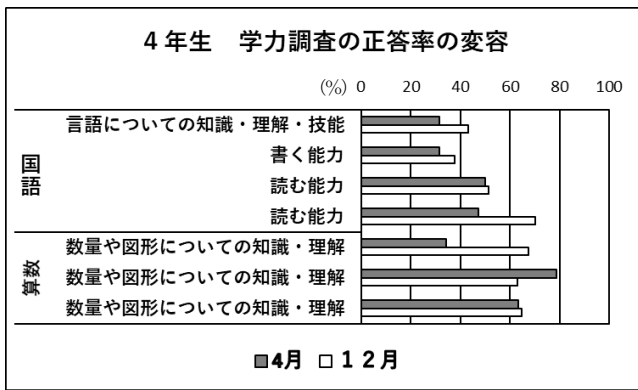


全教員が「充実していた」と答えており、校内研究に対して意欲的に取り組むことができていたことが分かった。

(2) 【仮説2に関わる調査結果】

埼玉県学力・学習状況調査において課題があった問題の正答率の変容

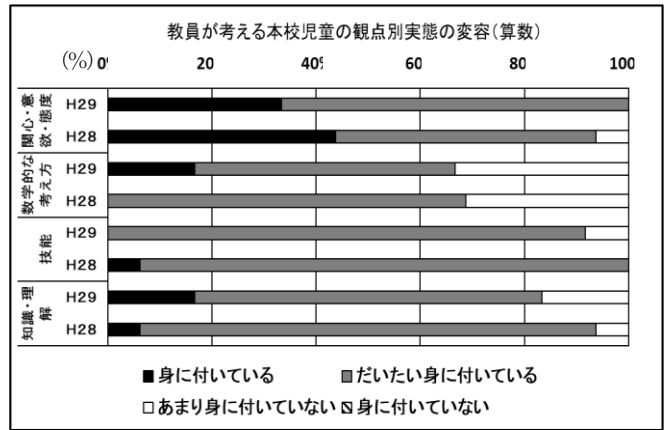
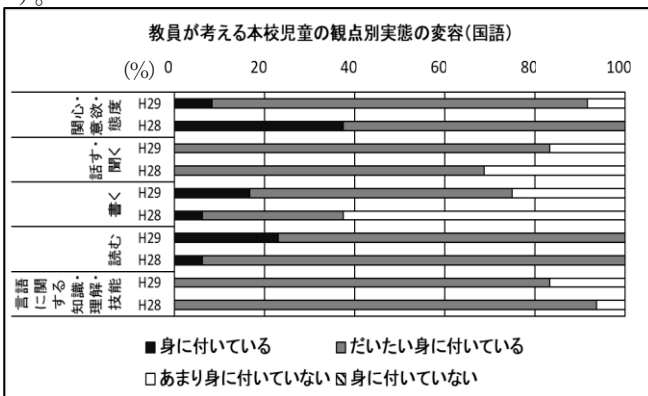
4, 5, 6年生において、埼玉県教育委員から出されている埼玉県学力・学習状況調査の復習シートを活用して、4月に行った埼玉県学力学習状況調査と比較を行った。埼玉県学力・学習状況調査の復習シートには、問題が抜粋して掲載してある。そのため、4月に行った調査結果から課題があった問題を選び、問題を作成した。12月に行った調査と比較した結果は以下のとおりである。



各学年とも正答率が向上した問題もあれば、低下した問題もあったが、今年度の校内研究において部会にする上で参考にした、国語の「読むこと」、「話すこと・聞くこと」、算数の「数学的な考え方」では正答率が向上した。

教員の児童の学力に対する意識の変容

昨年度、本校の教員に対して行った児童の学力に対する意識調査と同様の調査を今年度も行った。結果を以下に示す。

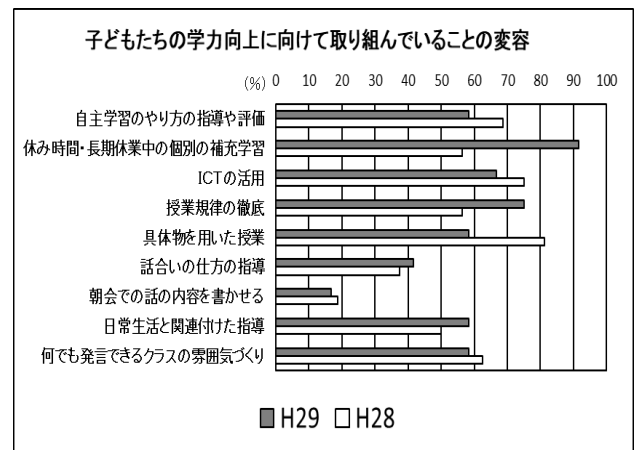


昨年度の教員の意識調査と比較して、国語は「話すこと・聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」は身に付いていると感じている教員の割合が増加した。一方で「国語への関心・意欲・態度」、「言語についての知識・理解・技能」については、あまり身に付いていないと感じている教員の割合が増加した。

算数では、「算数への関心・意欲・態度」や「数学的な考え方」は身に付いていると感じている教員の割合は増加した。一方で、「数量や図形についての技能」、「数量や図形についての知識・理解」についてはあまり身に付いていないと答える教員の割合が増加した。あまり身に付いていないと感じている具体的な理由は、以下のとおりである。

- ・漢字の定着率が悪いので、言語についての知識・理解・技能があまり身に付いていないと感じる。繰り返しの指導と同時にやり方を考える必要がある。
- ・尊敬語や謙譲語などの敬語が身に付いていない。授業だけの扱いでは定着が難しいので、日常的に使っていく必要がある。
- ・既習事項であるかけ算九九が身に付いていなかったため、わり算の指導では苦労した。百マス計算や、九九の暗唱したことでやっと身に付いてきた。
- ・普段の授業の中で、図形の定義を理解出来ていない児童が多かった。
- ・算数では、分からないから興味関心が低いことになっていると思う。

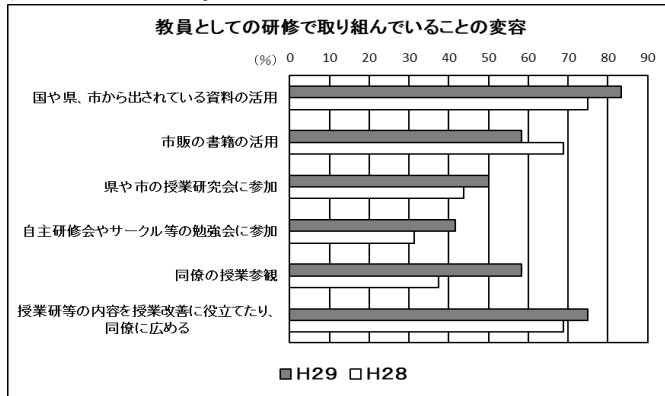
学力向上に向けての取り組んでいることの変容



「子どもたちの学力向上に向けて取り組んでいること」は昨年度と比較して、5つの項目で増加した。特に「休み時間・長期休業中の個別の補充学習」や「授業規律の徹底」に取り組んでいる教員の割合は大きく増加した。

(3) 【仮説1・2に関わる調査結果】

「教員としての研修で取り組んでいること」の調査結果は以下の通りである。



多くの項目で多くの項目で研修として取り組んでいることが増加した。個での研修ではなく、他の教員と協働して学ぶ教員が増えたことが分かる。特に「同僚の授業参観をしている」教員の割合は大きく増加した。一方で、「市販の書籍等を活用」して研修に取り組んでいる教員は減少した。

1.0 考えられる成果と今後の課題

(1) 仮説1に関わる成果

①児童の学力の課題に対して共通理解を図り、研究テーマを設定し、校内研究に見通しをもてたことで、意欲的に校内研究に取り組むことができた

第1回目の校内研修で児童の課題の共通理解を図り研究テーマを決定したり、課題解決のために具体的にどんな授業を行うかを部会で話し合ったりしたことで、全教員が校内研究で何を行ったらよいか明確になり、見通しをもって校内研究に取り組めた。その結果校内研究に対する意欲が高まったのではないかと考える。

②ワークショップ型の研修の機会を多く設定したり、部会の人数を少人数にしたりしたことで、一人ひとりがしっかり考え、校内研究に意欲的に取り組むことができた。

ワークショップ型の研究協議や研修を多く設定したことで、教員一人ひとりが、真剣に考えて発言する機会が増えた。また、協議の際、年齢構成をバラバラにしたことで、若手とベテランがお互いに学び合い、高め合うことにつながった。さらに各部会とも少人数で編成したことで、部員としての責任者を強く持つことにつながり、全教員が積極的に校内研究に関われたと考える。

(2) 仮説2に関わる成果

①同僚の授業を参観したり、各部会の取り組みの共通

理解を図ったりすることで、授業力が向上し子どもたちの学力を向上させることができた

同僚の授業を参観する機会が増えたことで、他の先生たちも持っている、指導技術を多く学ぶ機会となり、授業力を向上させることにつながった。また、各部会の取り組みの共通理解を図ることで、良い取り組みを知り、日々の授業に生かすことで、授業力が向上し、子どもたちの学力を向上させられたと考える。

②部会ごとのミニ授業研究会を行い、授業改善をしたことで、子どもたちの学力を向上させることができた

部会ごとのミニ授業研究会では、少人数で授業参観や研究協議を行った。研究協議では、積極的に意見を交わし、協議を深めたことで、日々の授業改善につながった。管理職にも毎回参加していただくことで、的確な指導を受けることもできた。また、指導案を焦点化したことによって、研究授業を行うことに対する負担感が少なくなり、積極的に授業を公開する教員が増えた。このことが、授業改善に結び付き、子どもたちの学力向上につながったものと考えられる。

(3) 今後の課題

今回の実践を踏まえ、今後、取り組むべき課題として以下のような課題が考えられる。

①本校内研究のスタイルの確立・継続

学校現場は、異動があるため教員が毎年入れ替わる。教員が入れ替わっても、意欲的に校内研究に取り組む授業を改善し、授業力を向上させるために今回の研究のスタイルを確立し、毎年継続していく必要がある。

②教師の達成感の持たせ方の研究

今回の研究では、校内研究に対する意欲や授業力向上をねらいとしているため、成果が目に見えてすぐには表れてこない。そのため研究に対する達成感の持たせかたが難しいと感じた。今後は研究を積み重ねながら、この点についても考えていきたい

1.1 参考文献

- ・中央教育審議会 答申 「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」(2015)
- ・中央教育審議会 答申 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の 学習指導要領等の改善及び必要な方策等について」(2016)
- ・福島県教育センター 「校内研修改善に向けた4つの提案」(2016)
- ・大分県教育センター 「一層やりがいのある校内研究」(2014)
- ・岩手県立総合教育センター 「校内授業研究の進め方ガイドブック」(2007)
- ・国立教育政策研究所 「平成28年度 全国学力・学習状況調査報告書」(2016)
- ・石川晋・大野睦仁 「これならうまくいく！笑顔と対話があふれる校内研修」学事出版(2013)
- ・北神正行・木原俊行・佐野享子 「学校改善と校内研修の設計」学文社(2010)